立正大学博物館第14回特別展　展示図録

中国古代瓦とアジアの梵音具

―仙場右羊コレクションと撫石庵コレクション―

2020

立正大学博物館

ごあいさつ

最近の都市化は、かつて都市の屋根を飾った瓦を駆逐し、白いコンクリートの建物ばかりが目立つように進んでいる。そうした変化の中で、あらためて瓦のもつ暖かさに気付くことが多くなり、伝統的な街並みが再評価されつつあることはいうまでもない。

瓦は、『日本書紀』によれば飛鳥寺の屋根に採用されたのが最初であるが、そのために百済から瓦博士が来日し、ようやく本格的な瓦葺建物が建設されることになったのであった。古代には、瓦は寺院の象徴であると同時に、大陸伝来の最先端技術を示すものでもあった。

日本最初の瓦は百済の技術を伝えるものであったが、瓦を生み出したのは中国であり、それは少なくとも春秋戦国時代に遡る。軒丸瓦を半分に切ったような半瓦当が、春秋戦国時代に流行し、宮殿などの屋根を飾った。瓦のルーツは中国にある。

しかし、われわれはふだん半瓦当などを間近にみることは稀であり、瓦葺の起源に思いを致す機会にめぐまれていない。そうしたなかにあって、今回、書家である仙場右羊氏寄贈のコレクションを公開し、中国の瓦を観察するまたとない機会が到来した。ぜひともご覧いただきたい。

なお、貴重な瓦などをご寄贈いただいた仙場右羊氏に、心より感謝申し上げたい。

2020年3月吉日

立正大学博物館長　　時枝　務

目　次

ふたつのコレクション…… 1
1　中国古代瓦…… 2
2　燕と斉の半瓦当…… 3
3　秦の円瓦当…… 7
4　漢の円瓦当……12
5　アジアの梵鐘……18
6　日本の梵音具……20

凡　　例

1　本書は第14回特別展「中国古代瓦とアジアの梵音具」（会期：令和2年3月2日～3月30日）
2　本図録の作成は、館長時枝務のもと学芸員・足立佳代が執筆・編集した。
　坂詰秀一初代館長、池上悟二代目館長には特にご指導いただいた。
3　中国古代瓦の写真は、主に『仙場右羊コレクション中国考古資料図録』（館蔵資料「基礎文献」叢刊第8輯）を編集した池田奈緒子（元本館学芸員）が、一部足立が撮影した。
　アジアの梵音具の写真は、主に上野恵二（本館初代学芸員）、内田勇樹（本館二代目学芸員）が撮影した。
4　本図録に用いた挿図の出典及び引用・参考文献は、巻末に揚げた。
5　図録に掲載して資料の番号は、コレクションNo.である。
6　展示にあたっては、浅見幹雄（本館事務職員）、佐藤豪大（本学学生）が手伝った。

協力者

池田奈緒子 小林康幸 紺野英二 高橋杜人（敬称略・五十音順） 奈良国立博物館 立正大学考古学研究室

ふたつのコレクション

眞鍋　孝志 氏

立正大学博物館の中核をなす所蔵品の一つに、撫石庵コレクションがあります。これは、眞鍋孝志氏（元日本古鐘研究会会長）が長年にわたって蒐集されてきた梵鐘を中心としたコレクションです。日本の梵鐘をはじめとして、中国・朝鮮・タイ・ベトナム・ミャンマーなど世界各国の鐘、鉦鼓、銅鼓、小金銅仏などがあります。これらのコレクションは、眞鍋氏により平成12年・13年に立正大学学園に寄贈され、平成14年博物館開館により博物館に移管されました。コレクションは、119点に及びます。

本館では寄贈された資料を整理し、平成12年に『撫石庵コレクション考古資料図録』を、平成13年に『撫石庵コレクション考古資料図録II』を刊行しました。平成21年にはその後寄贈された資料を中心に、館蔵資料「基礎文献」叢刊　第4輯『撫石庵コレクション考古資料図録III－眞鍋孝志氏寄贈考古資料－』としてまとめました。

常設展でも資料を展示し、特に伝橿原市出土梵鐘の複製品は、実際に撞いて音を出すことができるため、来館者に人気です。

仙場　右羊 氏

平成27年に、著名な書道家であった仙場右羊氏から、中国の古代瓦を中心とした文物を寄贈していただきました。仙場氏は、中国との国交が回復した昭和40年代以降40回以上にわたって訪中され、古い書体で表現された漢字を文様とする古瓦を蒐集されてこられました。200点以上のコレクションには、訪中の記念に購入した青銅器等の模造品も含まれています。

寄贈されたコレクションは、本館で整理し、平成31年、館蔵資料「基礎文献」叢刊　第8輯『仙場右羊コレクション中国考古資料図録』としてまとめました。

今回、二つのコレクションの一部を熊谷キャンパスの立正大学博物館で紹介します。

これら二つのコレクションは、眞鍋氏、仙場氏がそれぞれの思いによって蒐集され、寄贈されたものです。両氏ともに残念ながら鬼籍に入られましたが、所蔵資料を研究・教育に役立てたいというご遺志に添えるよう、活用するものです。

1　中国古代瓦

瓦は、建物の屋根に葺き、風雨から建物を守る建築資材です。日本には飛鳥時代、仏教の伝来とともに朝鮮半島の百済から伝わり、奈良県明日香村の飛鳥寺や斑鳩町の法隆寺などからその頃の瓦が出土しています。

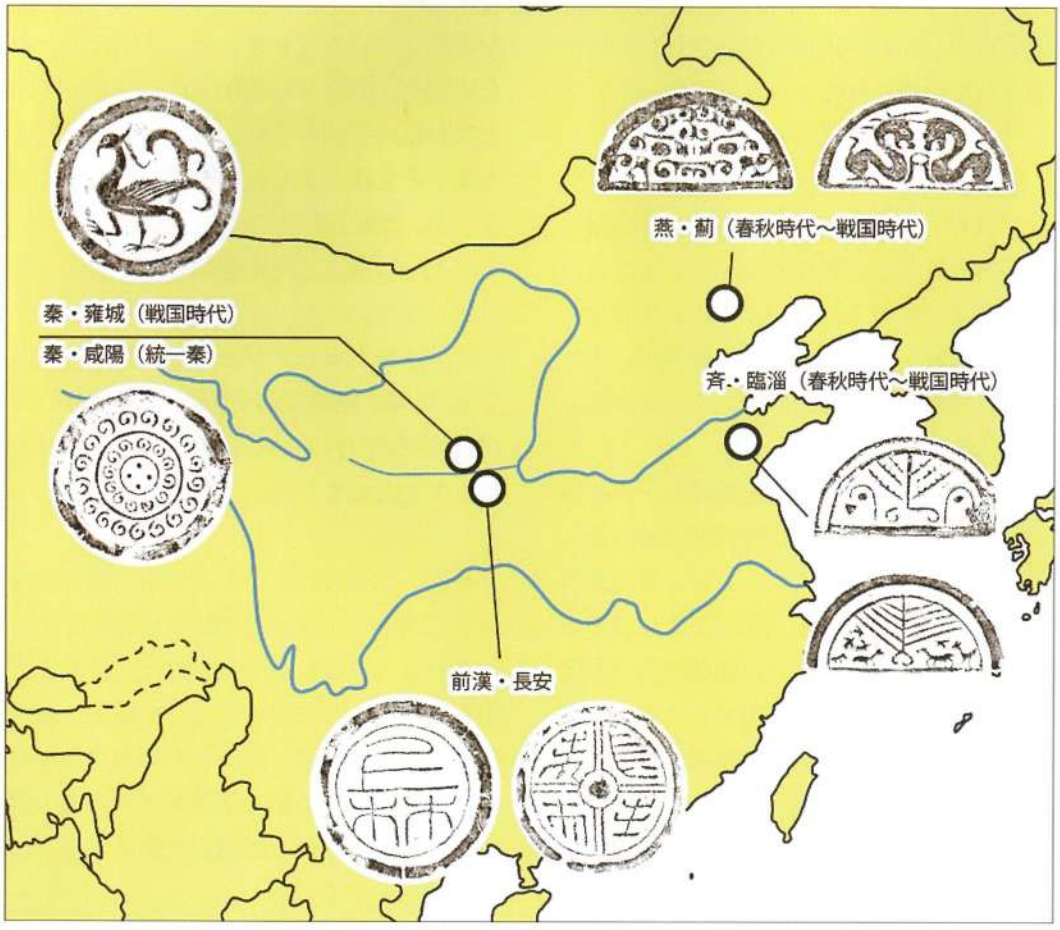
アジアでは紀元前 11 世紀中葉の中国・西周時代に瓦が使われ始めたとされています。陝西省の宮殿遺跡から最初期の平瓦が出土しています。当初、平瓦のみを使って建物の大棟や軒先を覆っていましたが、西周中期になると平瓦と丸瓦を組み合わせ、軒先に半円形の半瓦当を用いるようになります。

西周後期から戦国時代にかけて、瓦の普及が進み、軒先瓦の文様が多彩になっていきます。戦国時代は、各国でそれぞれ文様に特徴のある半瓦当が流行しました。秦では鳥獣紋を特徴とする多数の円瓦当がみられ、円瓦当が主となっていきます。

漢の時代には瓦当文に文字を配するようになります。

仙場コレクションは、燕・斉の半瓦当と、秦・漢の円瓦当が主体を占め、さまざまな文様がみられます。時代の特徴をあわせてご覧ください。

主要資料の出土地と年代



2　燕と斉の半瓦当

中国の春秋戦国時代、中国大陸北東部・渤海北西岸に広がる地域を治めた燕は、薊（けい）（現在の北京）を首都とし、紀元前285年ごろに最盛期を迎えました。薊城跡から出土した瓦は、半瓦当で、饕餮(とうてつ)紋（中国の神話に登場する怪物で、殷・周代の青銅器の文様として多用される）や龍紋などがみられます。

斉は、周代から戦国時代初頭にわたって渤海西岸を治めた強国で、太公望によって建てられました。斉の首都であった臨淄(りんし)城から出土した半瓦当は、左右対称に配置した文様が特徴です。中央に左右に枝を広げた樹紋、樹下に馬や鳥を配した樹鳥馬紋などがみられます。

中国略年表

前 1050 年頃	西周	武王、都を鎬京（宗周、陝西省西安市）に移し西周王朝始まる。
前 771 年		幽王、殺害される。
前 770 年	春秋	平王即位。都を洛陽に移し、東周王朝始まる。春秋時代の幕開け。 秦が正式に建国。
前 722 年		『春秋』の記載がこの年から始まる。
前 677 ～前 350 年		秦の徳公、平陽から雍城に遷都。
前 479 年		『春秋』の記載がこの年で終わる。
前 453 年	戦国	晋が、韓・魏・趙の三国に分裂する。
前 403 年		韓・魏・趙、諸侯として周王朝から認められる。
前 350 ～前 206 年		秦、雍城から咸陽へ遷都する。
前 264 年		秦、周を滅ぼす。
前 221 年	秦	秦の始皇帝、中国を統一。初めて皇帝の称号を用い、全国に郡県制を施行。 度量衡などを統一する。
前 210 年		始皇帝死去。驪山に葬られる。（秦始皇帝の兵馬俑つくられる。）
前 206 年		秦が滅ぶ。
前 202 年	前漢	劉邦（高祖）、漢王朝を興す。
前 200 年		漢、都を長安に置く。
前 141 年		武帝、即位する。

◆燕の半瓦当

A1　饕餮紋半瓦当　直径 20.2cm

A2　饕餮紋半瓦当　直径 19.0cm

A3　山形饕餮紋半瓦当　直径 17.6cm

A4　山形雲紋半瓦当　直径 18.2cm

A5　双鳥巻雲紋半瓦当　直径 16.4cm

A6　双龍紋半瓦当　直径 15.5cm

A8　双龍紋半瓦当　直径 15.8cm

◆斉の半瓦当

A9　樹双馬紋半瓦当　直径 14.5cm

A11　樹双騎馬紋半瓦当　直径 14.3cm

A12　樹双騎馬紋半瓦当　直径 17.0cm

A14　樹紋半瓦当　（直径 15.6cm）

A15　樹菊頭紋半瓦当　直径 12.6cm

A17　鈎雲紋半瓦当　直径 14.0cm

3　秦の円瓦当

戦国時代中期に斉・秦の二大強国となりましたが、紀元前284年に燕・趙・韓・魏・楚の5ヵ国連合軍に斉が大敗し、臨淄が陥落したことで、秦が一大強国となります。

瓦は、それまでの半瓦当から円瓦当瓦が主体になっていきます。

鳳翔県雍城からは、数多くの円瓦当が出土しています。瓦当文は、躍動感のある鹿、ユーモラスな貛（アナグマ）などの鳥獣紋が多くみられます。

紀元前221年に斉を滅ぼし全土を統一した秦は、咸陽を首都としました。瓦は、渦のような曲線を多用した円瓦当で、特に4つの区画内で渦を描く雲紋と蕨手文が二重に周旋する葵紋が主体となります。秦の始皇帝陵出土の瓦当には雲紋が多くみられます。

A19　双鹿紋円瓦当　直径15.2cm

A21　鹿紋円瓦当 直径14.5cm

A22　貔紋円瓦当　直径 14.0cm

A23　双貔紋円瓦当　直径 14.0cm

A24　虎燕紋円瓦当　直径　14.8cm

A25　四鳥紋円瓦当　直径 13.5cm

A27　虎燕紋円瓦当　直径 14.8cm

A31　虎燕紋円瓦当　直径 13.1cm

A33　雲紋円瓦当　直径 15.0cm

A37　雲紋円瓦当　直径 16.0cm

A41　雲紋円瓦当　直径 17.0cm

A45　葵紋円瓦当　直径 16.0cm

A49　葵紋円瓦当　直径 16.0cm

A53　蓮華紋円瓦当　直径 14.0cm

4　漢の円瓦当

秦王朝が紀元前206年に滅亡後、群雄割拠の状態にあった中国ですが、紀元前202年劉邦が項羽を破って再び中国を統一し、漢を建てました。

漢代の瓦は、瓦当に文字を表すものが多くなり、めでたい語句を表した吉祥句類，建物の用途に応じて宮殿類、官署類、祠堂類が表されたもの、朱雀や玄武など四神の図像類などが現れます。

また、A71、A72のように瓦当だけでなく、軒丸瓦全体が分かる資料からは、当時の瓦の製作技法を知ることができます。丸瓦の外面には粘土を叩き締めた跡である縄叩き痕、内面には丸瓦の型から粘土をはがしやすくするための布目の跡が残っています。丸瓦と瓦当の接合の仕方なども時代や地域によって違いがみられます。

◆吉祥句類

A54　「千秋萬歲」紋円瓦当　直径14.2cm

A58　「延年益壽」紋円瓦当　直径18.2cm

A60 「子孫富昌」紋円瓦当　直径 18.2cm

A62 「與天母極」紋円瓦当　直径 18.3cm

A71 「長生無極」紋円瓦当　直径 17.0cm

A72　「長生無極」紋円瓦当　直径 17.0cm

◆宮殿類

A76 「宮」紋円瓦当　直径 13.0cm

A84 「朝神之宮」紋円瓦当　直径 16.5cm

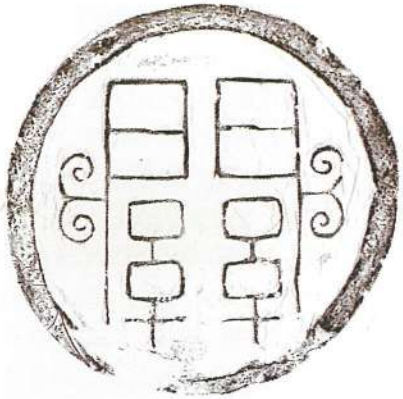
A86 「永壽嘉幅」紋円瓦当　直径 15.5cm

A89　「與華相宜」紋円瓦当　直径 14.5cm

A92　「漢并天下」紋円瓦当　直径 15.7cm

A93　「八風壽存當」紋円瓦当　直径 15.0cm

◆官署類



A97 「関」紋円瓦当　直径 15.5cm

A106 「馬」紋円瓦当　直径 14.4cm

◆祠墓類

A110 「秦氏冢當」円瓦当　直径 15.2cm

5　アジアの梵音具

仏教の法会や儀式などで使用する仏具のうち、打ち鳴らして音を出す楽器です。もっとも身近なのは、お寺の境内の鐘楼に吊り下げられている「梵鐘」です。大晦日に除夜の鐘を撞いたことのある方も多いでしょう。

寺院の仏堂には、鰐口、雲版、磬、鉦鼓、木魚、錫杖、磬子、太鼓、鐃鉢などがみられ、家庭の仏壇にも鈴や木魚が置かれています。

梵音具は、法会の合図や読経のリズムを取るなどのほか、その音色によって邪気をはらう、などの意味があります。また、仏堂内は本尊を中心に天蓋、仏花、幢幡や瓔珞などで美しく飾り、香を焚き、さらに磬子や木魚のリズムに合わせた読経によって仏堂内の荘厳を高める効果があります。

仏教が伝わった国々では、それぞれの国や地域で様々な形の梵鐘が使われました。ここでは、アジア各国の梵音具を紹介します。

口縁部が葉状の曲線を示す「荷葉鐘」に分類される。「大明宣徳年(1426〜35)造」の文字が陽鋳される。

11　鐘/中国・高さ 30.8cm

「荷葉鐘」に分類される。「大明嘉靖辛酉(1561)九月十九日造」と陽鋳される。

12　鐘/中国・高さ 108cm

鐘身に赤く着色された上・下帯と 4 本の縦帯があり、帯で4分割された部分には古代タイ語の銘文が刻まれている。

25　鐘/タイ・高さ　78.0cm

鐘身の下地は水色に着色されている。上・中帯と 4 本の縦帯で 4 分割され、それぞれの区画内に半円形状に垂れ下がった唐草様紋、仏像が配され、金色に着色されている。

26　鐘/タイ・高さ 63.2cm

白銅製。鐘身は中帯で上下に二分される。上部には蓮弁が2段に廻る。上半部にはパーリ語が刻まれる。

ミャンマーの鐘には撞座がなく、内側からたたいたと思われる。

27　鐘/ミャンマー・高さ 56.1cm

青銅製。鐘身は、中帯で上下に二分される。上部に蓮弁が2段に廻る。鐘身の上段と下段にはパーリ語の銘文が刻まれる。

28　鐘/ミャンマー・高さ 61.0cm

青銅製の鐘で、暗赤褐色を呈する。部分的に着色されている。鐘身の上部には蓮弁の中に宝相華文を配する蓮華文がめぐる。縦帯、中帯にも華麗な宝相華文を配する。

29　鐘/伝スリランカ・高さ 78.7cm

白銅製。鐘身は、中帯と縦帯で4分割され、中帯と縦帯が交差する部分には撞座が配される。

30　鐘/ベトナム・高さ 48.3cm

五鈷杵の柄をつけた青銅製の鈴。五鈷杵の柄の部分で分離できる。革製の入れ物に納められている。

44　金剛鈴/チベット・高さ 16.4cm

青銅製。口唇部底面に下記の銘文がある。
「鑄成鈑子一座懸排大興郊北禪寺」
「貞祐陸年戊寅七月　日」(1218年)

35　金鼓/朝鮮半島・最大径 40.2cm

6　日本の梵音具

楽器としての鐘は、中国の殷時代末期に祖霊を祭る礼器として使われた甬鐘（ようしょう）が起源と考えられています。甬鐘は、横断面が杏仁形を特徴とする青銅の打楽器で、春秋時代頃には音階の異なる「鐘」を横木に掛けて演奏し、編鍾と呼ばれています。甬鐘の表面の小さな突起は、後の梵鐘の「乳」につながるとされていますが、甬鐘が日本の梵鐘の直接の祖形なりません。

その後、仏教とともに日本にもたらされた梵鐘は、横断面が円形で、撞座を撞いて音を出します。本体である「鐘身」と鐘を吊り下げるための「龍頭」に大きく分けられます。「鐘身」は上帯、中帯、下帯、縦帯と呼ばれる線で区画され、それぞれ乳の間、池の間、草の間と称されます。乳の間の「乳」と呼ばれる突起は、日本の梵鐘の特徴の一つです。

青銅製。鐘身上半には「枚」と呼ばれる突起物を有する。
鐘頂の上に立つ把手状の「甬」をその特徴とする。

32　甬鐘/中国・高さ 30.8cm

池の間には寄進者や鋳物師などの銘文が刻まれます。

「龍頭」は正式には「蒲牢（ほろう）」と呼び、2頭の龍を背中合わせに付け、中央に火炎に包まれた宝珠を配しています。

日本の梵鐘の祖形となったのは、中国六朝時代の梵鐘とされています。

現在、奈良国立博物館に所蔵されている梵鐘は、銘文から太建7年・西暦575年に製

日本の梵鐘の部分名称

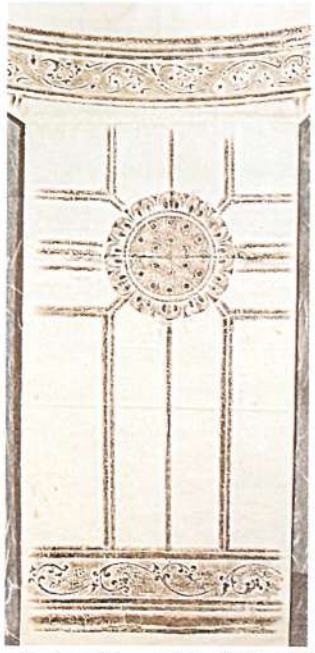
参考：梵鐘/中国・六朝時代　高さ 38.7 cm
（重文/奈良国立博物館所蔵・写真提供）

作されたことがわかります。その特徴は、横断面が円形で鐘身には上帯、中帯、下帯、縦帯によって区画が設けられています。中帯と縦帯が交差する部分には2箇所に撞座がありり、その位置は鐘身の高さの半分ほどの位置にあります。撞座と鐘を懸けるための龍頭の方向は直角の向きです。高さ40㎝に満たない小型の梵鐘で、乳はありませんが、日本の梵鐘の形に近い姿です。

日本に仏教が伝わったのは、飛鳥時代ですが、この時期の梵鐘は現存しません。現在、奈良時代の梵鐘が16口知られています。16口のうち、京都・妙心寺の梵鐘は、戊戌年（698年）の銘文があり紀年名のある梵鐘としては日本最古です。106は撫石庵コレクションの妙心寺鐘の拓本です。撞座の位置が、1の伝橿原市出土鐘や3の長徳寺鐘と比べて、高いことがわかります。

このように、日本の鐘は撞座の位置が時代とともに下がる傾向にあります。

1の伝橿原市出土鐘は鐘の縦半身がつぶれ、全体も歪み、龍頭も失われていますが、龍頭の向きが撞座と直行しており、古式を示していることから奈良時代から平安時代前期に製作されたと推定されます。



106　妙心寺鐘　上帯・撞座・下帯拓影/軸長122.3㎝

1　梵鐘/伝橿原市出土・高さ46.1㎝

2　梵鐘/伝橿原市出土鐘復元品・高さ52.2㎝

撫石庵コレクションには、近世の梵鐘、半鐘があります。梵鐘と呼ばれるのは、1尺8寸（約55㎝）以上のもの、または口径2尺3・4寸（約70〜73㎝）以上、100貫（約375kg）以上のものです。それ以外の1尺7寸以下（約52㎝）以下の鐘を「半鐘」、さらに高さ2尺5寸（約76㎝）の鐘は「喚鐘」と区別されます。

2の長徳寺鐘は、銘文から元文3年・西暦1738年に製作されたことがわかります。笠の部分に流雲文、駒の爪には反花が表されています。

銘文にある「東奥気仙郡横田邑」は、現在の岩手県陸前高田市横田町で、鋳物師の「大西五郎八貞清」は、宮城県仙台市を中心に活躍していた鋳物師であることがわかっています。この鋳物師による梵鐘は他に4口が知られていましたが、いずれも戦時中に供出され長徳寺鐘のみが現存しています。

4の安光寺半鐘は、池の間3区に銘文が刻まれています。第1区の銘文にある「武州那珂郡古郡村」は、現在の埼玉県児玉郡美里町古郡の地で、安光寺は現存しています。美里町の文化財に指定されている安光寺所蔵の梵鐘に寛延元（1748）年の紀年銘があることから製作年代は同時期と考えられます。

また、鋳物師は江戸神田に住した「粉川市正　藤原宗次」であることがわかります。

3　長徳寺鐘・高さ　123.9cm

4　安光寺半鐘・高さ　52.6cm

6の半鐘は銘文から銘文から、寛政7年・西暦1795年に「越後国頭城郡高津郷野尻村」（現在の新潟県上越市大字野尻）の真言宗臨行寺の半鐘で、鋳物師は、江戸で活躍した長谷川豊前守藤原重次と考えられます。

6　半鐘・高さ48.2cm

梵音具には梵鐘の他に鉦（かね）があります。台に懸けて撞木でたたき鳴らす鉦鼓（しょうこ）や鉦鼓から派生したと考えられる伏鉦（ふせがね）です。伏鉦は、鉦に脚を付けて、台の上などに伏せて置き撞木でたたきならします。

36 は鉦鼓（しょうこ）です。鼓面は円形で、中央に撞座区を設け、体部には懸垂のための鰭状の耳が付けられています。

口唇部の裏面の銘文から、武州足立郡鴻巣領元宿村（現在の鴻巣市本宿）で、安永５年西暦 1776 年に奉納、鋳物師は江戸神田に住した西村和泉守であったことがわかります。

38 は伏鉦です。底部には３つの脚がつけられています。

鼓面は円形で周縁には溝を巡らせ、中央には撞座区を設けています。

口唇部裏面に銘文があり、「信州高遠領」「南福地竹松村中」と刻まれています。信州高遠領南福地竹松村は、現在の長野県飯田市です。

36　鉦鼓・最大径 41.3cm

38　伏鉦・最大径 20.8cm

【引用・参考文献】

池田奈緒子編『立正大学博物館品川キャンパス展示　梵音具－撫石庵コレクション－』立正大学博物館　平成27年

池田奈緒子　館蔵資料「基礎文献」叢刊　第8輯『仙場右羊コレクション中国考古資料図録』立正大学博物館　平成31年

伊藤　滋編・著『中国古代　瓦の美－文字・画像・紋様の面白さ』郵研社　平成25年

上野恵司『撫石庵コレクション考古資料図録』立正大学学園　平成12年

上野恵司『撫石庵コレクションⅡ考古資料図録』立正大学学園　平成13年

内田勇樹　館蔵資料「基礎文献」叢刊　第4輯『撫石庵コレクション考古資料図録Ⅲ－眞鍋孝志氏寄贈考古資料－』立正大学博物館　平成21年

内田勇樹『第5回企画展　梵鐘－撫石庵コレクションを中心に－』立正大学博物館　平成20年

香取秀眞『江戸鑄師名譜』昭和27年

小林康幸「仙場右羊氏寄贈中国古代瓦コレクション」立正大学博物館館報『万吉だより』第22号　平成28年

陝西省考古研究所『新編秦漢瓦当図録』三秦出版社　昭和61年

坪井良平『新訂　梵鐘と古文化　つりがねのすべて』ビジネス教育出版社　平成5年

坪井良平『日本の梵鐘』角川書店　昭和45年

坪井良平『梵鐘と考古学』ビジネス教育出版社　平成元年

内藤　栄「梵鐘」『奈良国立博物館の名宝－一世紀の軌跡』奈良国立博物館　平成9年

向井佑介「中国に於ける瓦の出現と伝播」『古代』第129・130 合併号　平成24年

楊力民　『中國古代瓦當藝術』上海人民美術出版社　昭和61年

李発林『斉故城瓦當』文物出版社　平成2年

起力光　『中国古代瓦当口典』文物出版社　平成10年

表紙写真：饕餮紋半瓦当
裏表紙写真：伝橿原市出土鐘

立正大学博物館　第14回特別展
中国古代瓦とアジアの梵音具
－仙場右羊コレクションと撫石庵コレクション－

令和2（2020）年3月2日
編集・発行：立正大学博物館
〒360-0194 熊谷市万吉1700
TEL 048-536-6150
印刷・製本：ヂサイ印刷有限会社